

第3回「釧路湿原川レンジャー学習会」が開催されました

平成27年10月16日(金)に、23名が参加して「第3回釧路湿原川レンジャー学習会」を開催しました。

今回は環境省主催による、標茶町塘路湖付近での「オオハンゴンソウ防除」と「塘路湖畔歩道の散策」、釧路町達古武湖での「自然再生事業の見学」を行いました。



位置図

オオハンゴンソウ防除

今回のオオハンゴンソウの防除は、今年度の第1回学習会で防除を実践したサルボ展望台付近の同じ場所で行いました。

作業前に環境省の渡邊自然保護官から「前回の防除後に釧路湿原川レンジャーの菊地氏が駆除してくれたので、今は小さな芽が出ているだけです。オオハンゴンソウは、その小さな芽で越冬するので、今日は、皆さんで駆除していただけたらと思います。」と説明がありました。

作業は、NPO法人環境把握推進ネットワークPEG代表の照井滋晴氏に見分け方など、オオハンゴンソウ防除の解説をしていただいてから行いました。今回は、1時間程度の作業でしたが、ゴミ袋2袋分(約10kg/袋)のオオハンゴンソウを駆除しました。作業後に渡邊自然保護官は「前回もお話ししましたが、利尻ではオオハンゴンソウの防除に10年かかっています。最初の2~3年でかなり減ると思いますので、継続すれば、防除できると思います。来年度も防除を実施したいので、皆さんにご協力いただけたらと思います。」と言っていました。



照井氏

渡邊自然保護官

オオハンゴンソウの見分け方(葉や茎で総合的に判断)



葉の特徴



茎の根元が赤い



防除中のビュッンを付けて駆除



防除後に記念撮影

塘路湖畔歩道の散策

防除後、塘路湖エコミュージアムセンターに移動し、指導員の佐藤氏に解説していただきながら塘路湖畔歩道の散策を行いました。

塘路湖畔歩道は、昨年、環境省が整備し、塘路湖畔を眺めながら散策できる約600mの歩道で、図の①~⑤に解説看板も設置してあります。なお、佐藤氏に解説していただいた内容は、表-1、2にまとめました。



塘路湖畔歩道位置図

表-1 塘路湖畔歩道の散策解説

塘路湖畔歩道散策の主な解説内容	
①塘路湖(解説看板)	<ul style="list-style-type: none"> ・釧路湿原で最大の湖。周囲約1.8km。 ・釧路川での貯水池の役目で、ダムのように水を調整している。また、湿原の泥炭(ピート)もスポンジの役目で水を調整しており、ある程度、自然の調整で洪水には至らない。 ・昔、イトウは塘路湖にもいた。サケの仲間が警戒心が強く、オレンジ色の卵を産む。 ・湖畔には、ハルニレ、ミスナラ、ヤチダモ、オニグルミなど多くの種類の樹木が生育している。
②塘路湖とアイヌの人々の暮らし(解説看板)	<ul style="list-style-type: none"> ・アイヌの人々の食料として、水草であるヒシの実(ベカンベ)がある。 ・緑色のベカンベは9月に黒熟すると水底に沈むので、沈む前に舟で収穫する。実はデンプン質が多く、栗のような食感で若干の甘味がある。
③塘路湖と縄文時代の人々の暮らし(解説看板)	<ul style="list-style-type: none"> ・標茶町には塘路湖を含めて、お墓や火を焚いた跡などの遺跡を含み、100か所以上ある。 ・復元した竪穴住居があり、この辺りをマサコヤノシマ遺跡という。縄文時代の土器の破片や鏃(やじり)などの遺物が発見されている。 ・釧路湿原は6千年前まで海の中で、縄文時代から人が住んでいた。
④塘路湖で見られる鳥(解説看板)	<ul style="list-style-type: none"> ・ハクチョウやカモ、ヒシクイ(ガンの仲間)などの水鳥が渡ってくる。 ・エサとなる魚やタニシ、カラスガイなどが生息し、カワセミなども見られる。
⑤ドラム缶橋(解説看板)	<ul style="list-style-type: none"> ・昔は国道から元村キャンプ場に渡る道路が無く、迂回が必要だったため、対岸の国道へと結ぶドラム缶の橋があった。(昭和40年頃) ・ドラム缶に板を張ってワイヤーで吊した橋なので、非常に揺れた。

【裏面へ続く】

表-2 塘路湖畔の散策解説

塘路湖畔歩道散策の主な解説内容

○周辺の自然
・エゾリス エゾリスはオニグルミをキレイに割って食べる。動物によって、オニグルミなどの食べ方が違うので、フィールドに落ちている食べ殻を見つけたら、どの動物が食べた物なのか判断できる。
・ヤチダモ タネの先端が翼になっており、ねじれている。落下する時にプロペラのように回転して、タネを遠くに飛ばす。同様にイタヤカエデなどのカエデの仲間にもタネに翼があり、遠くに飛ばす。
・センノキ（ハリギリ） タラノキ（タランボ）の仲間で、トゲがあり、タランボと同様に山菜として食べられる。
・コウライテンナンショウ ヘビノタイマツとも言われており、秋に赤い実が目立つ。その年によって同じ株の雌雄が変化する植物で、栄養が豊富な株はメスになり、栄養が不足している株はオスになる。
・スズメバチ 今年は、スズメバチが多く、9月頃から一気に増加し、塘路湖畔歩道沿いでも巣が作られ、一時閉鎖した。

最後に佐藤氏は、「多くの種類の木があるということは、他の生き物の支えになっています。今年は釧路でも台風や暴風雪が多く、日本だけでなく、地球全体で変わってきている。今後どうなるのかですね。スズメバチを見ても、ちょっとした気温などとの関係で、増える。我々もそうですが、自然に生かされている感じがします。」とっていました。

なお、参加者からは次のような質問がありました。

○何の魚がいるのですか？→今は、コイ、フナ、ワカサギ、アメマス、ニジマス、カレイなど38種類くらいです。もちろん、季節によってサケも遡上してきます。

○釣りはして良いのですか？→漁協が管理しているので、遊漁料がかかります。



佐藤氏の解説を聞く参加者



整備された歩道を散策



復元された竪穴式住居



歩道から眺めた塘路湖

自然再生事業の見学

午後からは、釧路町達古武湖に移動し、環境省の島中補佐に説明していただき、自然再生事業の見学を行いました。

①達古武湖自然再生事業について

かつての達古武湖は、多種多様な水草の花が咲いている、湿原の宝石と言うことで有名な場所でした。しかし、15年くらい前からアオコが大発生して水質が悪化し、その収束後の現在は、ヒシが繁茂しています。ヒシによって水質は改善されましたが、その大量発生によって、他の水草が生育できずに、かつての多様な水草が失われている状態です。そこで、下記の目標と方法で、自然再生事業を実施しています。



島中補佐による圃場の説明



圃場から見えるカラマツ人工林

【事業の目標】

達古武湖に流入する栄養塩類の流入負荷と、ヒシ繁茂が水生植物の生育環境に与える圧力を低減することにより、達古武湖のヒシ以外の水生植物が安定的に生育できるような環境を保全・復元すること。

(1) ヒシの繁茂による水生植物への負の影響の低減

ヒシ以外の多様な水生植物が安定的に生育できる場所を確保するため、人為的なヒシの分布域制御（30×30mの人力による刈り取りを数箇所）を行う。

(2) *富栄養化の原因となる栄養塩類の流入量削減

多様な水生植物が安定的に生育できる状態とするためには、達古武湖に流入する栄養塩類（リンや窒素等）の負荷削減（高濃度の土砂を除去、酪農家等への流入抑制の普及啓発）を行う。

※富栄養化：肥料などに含まれるリン・窒素が湖などに流入して栄養分が過剰になることで、アオコなどが大発生する。

②釧路湿原達古武地域自然再生事業について

かつて釧路湿原流域では、カラマツによる単一樹種の一斉造林が進みました。このカラマツ人工林は、「①北海道には自生していない（本州原産）」、「②単一樹種を一斉造林した単純な構造」という点で、本来の広葉樹の多種多様な自然林と比べて自然度が低いことが課題となっています。そこで、下記の目標と方法で、自然再生事業を実施しています。

【事業の目標】

生物多様性を高めるためにこの人工林を速やかに自然林へと再生させることと、そのための手法の開発・検討を目的とする。

(1) ササ刈り→林床のササを除去し、自然散布による稚樹の侵入を促す

(2) 育苗→圃場で自然林のタネから育苗することで、遺伝子の攪乱を防ぐ

(3) 植栽→3~4年くらい育苗し、50cm以上に育った苗を選別して、ランダムに植栽

(4) カラマツの間伐作業→林床に光を入れ、稚樹の成長促進を図る

(5) エゾシカ対策→植栽箇所や圃場を防護柵で囲い、被食から守る

